

平成25年9月9日

各位

株式会社 おぎそ
小木曾 順務
参加事業
土岐中央ロータリークラブ会員
NPO法人いわむら一齋塾理事
(社) グリーンライフ21

どのようにして**Re-OGISO**が生まれたか、よく質問を受ける。

「書を著して後生に残す」この言葉があるが、後進のためにも至った経緯は残さなければいけない。どうも他人と違い出身、学歴および職歴に帰する所がある。

よって、時間軸で**Re-OGISO**が誕生するまでの概要を会社変革と共に説明する。

●昭和25年10月生まれ 愛知県西尾市出身（真宗大谷派（東本願寺）

浄徳寺）14世の父太籐順謙、母きよの五男（祖父順海）として誕生。祖父順海は慶応元年生まれで明治期、東本願寺擬講として「今釈迦」として人びとに慕われたとのこと。そんな活躍を耳にしながら幼少年期を過ごす。実家の「寺宝物」である聖徳皇院（東郷平八郎直筆）を眺め、昭和30年代のテレビで高杉晋作、吉田松陰を知り、少年期には山本五十六など歴史上の先人達を知る。傍ら、門前の小僧の私は親鸞聖人、阿弥陀・釈迦・観音



蓮如上人の逸話から「仏具」「絵解き図」「地獄絵図」「日用品」 1300年の歴史をもつ
に至るまで数々の貴重品が身近にありこの「寺宝物」に触れる機会も 三が堂
多くあり、また、境内には春夏秋冬の果物類もあり興味津々と眺める時代でした。

●「商船士官の学歴を持つ」

昭和45年3月 近藤真琴開校の国立鳥羽商船高等学校(機関科専攻科)修了

近藤真琴：明治期の教育者五人衆の一人

昭和46年4月 明治海運株式会社に機関士として勤務

昭和49年6月 甲種機関長実技試験に合格

昭和51年10月 明治海運株式会社1等機関士に昇格

昭和52年7月 明治海運株式会社を退社

海国日本の一員となり貨物船、コンテナ船、20万トンのタンカーなどに乗船し、勤務中に地球を3周。昭和52年頃から輸送コスト問題が深刻化し、外国人と日本人が一緒に乗り込む時代（混乗船）に入り、思慮の上、異世界である「焼き物産業」に縁あって飛び込む。

●「窯業界にチャレンジ」

昭和52年10月 小木曾商店に入社、友美と結婚 後に順哉、剛史、哲也が誕生する。

昭和59年3月 有限会社小木曾商店代表取締役役に就任

昭和39年4月 先代亡き哲郎氏（瑞浪市大湫町出身/妻智津子）が小木曾商店を設立。氏は（株）丸忠から兼平正明を引き連れ独立し、輸出陶磁器卸業を立ち上げ、アメリカチャイナタウン向け中華食器の販売を行う。残念ながら昭和50年3月、50才の若さで他界され残された智津子社長の下、兼平氏と二人で大成貿易、日本物産などの業務を継承されていた。52年10月、縁あって入社しその後「円高ドル安」で「逆風」を経験、輸出事業激減の中、業務内容を転換するべく悪戦苦闘、「付加価値」を求め昭和59年4月 陶磁器サンドブラスト加工で特許を取得、花瓶類などノベルティーで商品化に成功、また山五製陶のディナー商品加工を請け負い、急場を凌ぎながら業務を継続していた。

昭和62年10月、土岐市試験場で高強度磁器食器が誕生、山津製陶との係わりで販売に携わる。

この当時、陶磁器業界の「破損問題」対処法として「割れにくい高強度磁器食器」を小林雄一氏（現愛工大教授）が開発。その研究成果から名古屋市立大森小学校（籾山昭校長）ランチルームで試験採用され、籾山昭校長から「給食は生きた教育の場」「丈夫な磁器食器こそ、生きた教材として活用できる」と教示されこの道歩くことを決心する。平成元年には全校磁器食器に切り替わり、当時「スcoop」として新聞、マスコミに取り上げられた。

この情報を八千代市保育課が入手し、採用打合せで八千代市入り、ここで「ぞうさん柄」「やさい柄」が誕生する。昭和63年9月の出来事である。

ぞうさん柄誕生後「給食企画体」からおぎそに電話が入り、企画体の協力を得ながら磁器食器市場に進出、発売に携わる。この時期、三重県（伊勢市、鈴鹿市）で採用される。伊勢市教委挨拶後、江崎隆夫氏（鳥羽ヤンマー・友人）を尋ね、学校給食向けの生ゴミ処理機の販売を進められる。平成2年6月の出来事である。



知育 徳育 体育 食育

● 商船士官の経験を活かし、いち早く、環境機器販売事業に参戦する

平成4年4月、大治町立大治小学校にヤンマー生ゴミ処理機第1号機が採用され、ヤンマーディーゼル(株)環境機器販売特約店となり餌取英樹氏が入社、私は平成6年6月、祝砲をあげるが如くヤンマーゴルフコンペ（旭カントリー）でホールインワンを達成する。

学校現場では生ゴミ堆肥化リサイクルが「環境教育」として取上げられ「資源活用」という言葉をここから耳にする機会が多くなる。学校給食センター・老人ホームなどで採用され、平成17年度までには約40箇所ほどの施設に販売、保守契約を締結する。

平成7年4月 コンドーFRP工業(株)販売特約店となる。この時期に稲葉雄造氏が入社し環境部門が立つ。当時、岐阜県下でも下水道整備事業が活発化し、特定事業所である学校給食センターの厨房排水が下水道に繋がれ、下水規制で「厨房排水油脂分解システム」の提案営業を開始、県立病院・学校給食センター・老人ホームなどで採用され、平成17年度までには約40箇所の施設で契約締結。この両特約店事業から社会整備、社会資本の大切さ、資源の大切さを体感し始める。

所謂、環境製品の幕開けである。

● 強化磁器が右肩上がりに

昭和63年八千代市、鈴鹿市、伊勢市、高山市で採用され始めた「ダイアセラム」だが薄ければ割れる、厚ければ重すぎる、こんな言葉が市場で氾濫する。詰まるところ三信など他社メーカーは樹脂が本業であり薄い食器で市場を展開させ、おぎそ製は学校給食市場で「重いダイアセラム」と揶揄される。

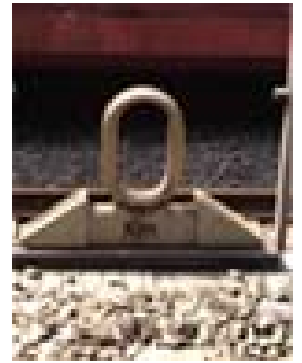
平成5年4月には、加納志貴氏のアドバイスで株式会社 おぎそ に社名変更する。中部圏内の保育業者「チャイルド社勝田氏」と出会い、環境事業と保育市場を含めた営業展開が始まり岐阜市保育課で「ダイアセラム」が全面採用される。

平成5年以降、高強度磁器の「良さ」が認識され、学習研究社・フレーベル館・世界文化社などに「高強度磁器食器」が(株)給食企画体からOEMで供給され始め、保育のダイアセラムとも言われ実績として鹿児島、徳島、札幌等々全国に納品され始める。

● 全国の学校給食市場を調査開始する

平成8年頃、ポリカーボネート製食器のビスフェノール問題が横浜市をはじめとする多くの自治体で表面化し、また、同時期、足立区、奈良市内ではコレル食器の破損で失明事故が表面化し、

いわき市教委では、三信製強化磁器食器（128φ145g/200MPa）が半年で40%を超える破損が新聞紙上に取り上げられいわき市議会を賑わし市教委担当者がセラテクノ土岐を尋ねるといったケースもあった。保育実績を基に、強化磁器食器の市場調査を開始し、磁器食器採用の先進地は破損実態を把握するため全国行脚を開始する。いざ、歩くとなると足が震えたが祖父の時代と違い交通網が整備され狭い日本だ、一人で歩こう、得るものが無ければ・・・と覚悟を決め、歩けば新たな道、見えるものがあるのでは？・・・こんな心の葛藤を抱きながら船出をした。



東京駅ゼロkm碑

平成10年、東京都北区で採用、北区事例が横浜市に飛び火し、横浜市が中津市に飛び火し弊社が唯一の特徴とする高強度、所謂丈夫さ業界一が認められ中津市では「おぎそブランド」で受注する。この経験が後々に活きる。10年以上の歳月を掛け1,400以上の市町村教育委員会の食器事情を把握し、給食用市場にも磁器素材が介在できるといった認識を新たに得たことが今につながったのである。ここが本当に歩いた者にしか見えない財産であった。（人生のゼロ碑）

●平成6年10月 土岐中央ロータリークラブに入会する

19年間、ロータリークラブ会員として全国の町々でメーキャップをし、地元各位の方々と挨拶でき、事業家として歩くことが出来たことに感謝している。

●平成12年4月 エコマーク誕生前、グリーンライフ21（GL21）が組織されるがこの時点で山津製陶と相談し入会する。

●平成14年12月 NP0法人いわむら一齋塾に入会する

全国行脚の最終地である熊本空港に無事着陸。この時、感慨無量の達成感を得、熊本城復元整備基金募集中であり少額であるが「御志納」を済ませる。晩年小泉八雲が居した熊本市で横井小楠を視察、ここで儒学者佐藤一齋を知り、「河井継之助」「山田方谷」「西郷隆盛」の指導者が「佐藤一齋」、出身が「岩村藩」である事を知り、後に岩村資料館を訪ね館長の紹介でいっさい塾事務局長「鈴木隆一氏」と出会い入会する。景気低迷が続く日本、備中松山藩で財政再建した山田方谷などは「鏡」でありこの全国行脚中に多くの方々に出会い、「言志四録」を片手に本当に多くのことを学んだ。



佐藤一齋語録

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只一燈を頼め」この条文こそ、心に留め、自分の信じた道を歩くのみ、明石辺りの電車の中でこの条文を何度も何度も書き写した事を思い出す。今では、毎年持ち回りで開催される全国藩校サミットなどは確かに「歴史から現実を学ぶ」ことが出来る良き道場である。偉大な先人無くしては、今はなくここに心を寄せる人を少しでも養成できないか、こんな心が私に芽生え始めている。

この「当今の毀誉は懼るるに足らず。後生の毀誉は懼る可し」幼少の頃から耳にしていた言葉である。「生家を当てにするな、泥をかけない生き方をしろ」と兄たちから指導を受ける。

現世で悪く言われようが誉められようがそれは恐るるに足りない。我が身の得失、利害は心配するに当たらないが子孫に及ぼす影響は十分に考えていかなければならない。

仕事は入札、受注しなければ会社は続かない。「どうしても受注したいのか？」「一晩、親鸞さんに聴いてからでも遅くはないのではないか？」焦りを察した言葉を頂きここは断念する事が出来た。この条文こそ、分岐点に立ったとき事業家として思い出すべき言葉であり肝に銘じる条文です。

●差別化を目指す

「人に接すること衆多なる者は、生知、熟知を一視し、事を処する練熟なる者は、難事、易事を混看す」こんな難解な言葉を言志四録で読んでいます。

多くに他人に接する人は、少ししか知らない人もよく知っている人も全く同じよう視てゆくもので

ある。ピーク時には年間千人以上の方と名刺交換、霞ヶ関から始まり東京都庁を始め道府県庁、政令都市、中核都市、町村役場、設計コンサル、ゼネコンあり、厨房業界、国会議員、県議、市議、町村議員、ロータリーを含め本当に色々な職種の方に出会い「**着眼高ければ、即ち理を見て岐せず**」という言葉に出会う。出来るだけ大所高所に目をつければ、道理が見えて迷うことがないと言う意味である。

平成15年4月、市場調査後、市場では200MPaと220MPaの違いなどはさほど認識されず、結果として差別化のために山津製陶で「300MPa素材」を開発したが市場は「違いは認めるもコストアップを指摘」した。ここで費用対効果から価格アップは市場で受け入れられない現実を知る。この辺りの流れが極めてきつい市場環境でもあった。また、強化素材に色釉薬がないことを市場から指摘を受け平成15年4月 高強度磁器食器開発グループ結成、コア企業となり平成16年3月 色釉薬（ノア）の開発に成功する。（15年度岐阜県補助）

●オーシステムが考案される

ヤンマーで学んだ資源保護の時代が到来している。

この資源保護を取り入れ生き残りをかけ問題点を把握することに専念し始める。

1. 破損問題を道義的に解決すること
2. 強いだけ、所謂300素材では勝てない
3. ますます、資源は高騰する
4. 高価なアルミの廃棄、現状認識は私だけである

開発するリサイクル素材は、回収した資源で現状強度より10%アップさせる、所謂、混ぜて強い食器(240MPa)を作ることが消費者から共感を呼ぶ、ここにつながったのである。

このように問題点が精査でき、これを解決した食器こそが市場で勝ち組になれる、この考えが成り立ち、単なる想像から創造へと変わっていったのである。事はリサイクルである。誰かがやらなければ、汚れた食器を本当に回収する事が出来るか、回収した他社製で強度維持が出来るか、やってみなければ解らないのではないか。こんな葛藤の中、秋田出張中、高校生5人組から「僕らの町にごみを捨てて帰るの」「何故、資源化しないの」この会話から資源回収を決断し、経験豊かな山津製陶と小林雄一教授に**Re高強度素材240MPa**を製造依頼する。結果、要求水準を満たす素材開発から商品化までできたのである。あとは回収である。港区環境課のアドバイスで有価回収で資源循環できるリサイクルの輪（オーシステム）が企画の段階で出来上がった時は、正に「**青天白日は我にあり**」の状況であった。前年の「ノア」開発の経験を活かし、この平成17年3月には色釉薬（いろなごみ）の開発に成功する。（16年度岐阜県補助）

この「**青天白日は我にあり**」に浮かれることなく、東本願寺から廃瓦を頂き、瓦工場扇面図を添えた金箔碗を試作し、浄徳寺長兄の意見を頂きたく訪問した。結果、「お前もお寺の子だ」「よく考えた」こんな言葉を耳にし、今後は自信を持って歩く、ここにつながったのである。

*明治28年に門信徒の寄進で再建された東本願寺が平成の修繕事業で瓦の葺替を行い、その廃瓦（20%含）で金泊茶碗を試作。全国の環境フェアで展示すると「門信徒」の方々から「有り難いお茶碗ね」とご理解を頂く事、多くあり廃瓦といえども人によっては大事な物、文化財の資源活用の大切さを感じ、「学校の磁器食器こそ学校に戻す所に意味がある」この考え方こそが寺に生まれた者しかできない発想であり、これが感動を与えるものづくりである。

何度も乗降した東京駅。1914年に辰野金吾氏（東工大1期生）が設計した三階建てが復元、新装オープンした。戦前、戦時を通し支えてきたこのレンガがJR東日本への提案も受け入れられず大量の



東本願寺廃瓦入り金箔碗



レンガ屑として山の中に簡単に処分された。提案内容は全国の陶芸を志す若者に廃レンガを活かした粘土を製作し東京駅構内で「廃レンガでの陶芸展」を開催、目指す若者には登竜門にもなる。この様なアイデア商品こそが若者に感動を与え「人材育成」にも繋がると思う。この100年間、どれだけの他人が故郷から志を以て東京駅に立ったことか、先人達の偉業の上に成り立っている日本の経済である。

「マネーゲーム」に走り「義利両全」の考え方が蔑ろにされる日本に違和感を持つ。



吾、只、足を知る

● リサイクル食器が開花する

平成17年5月リサイクル高強度磁器食器OGISOがエコマーク認定品となる、認定されなければ台東区の仕様書に記載されない現実がある。この認定証書が社に届くのを心待ちに、届いたときの気持ちは「やったー」であった。

正しく合格であった。

平成17年8月全国初のエコマーク仕様書、台東区がリサイクル高強度磁器食器を初採用、12月に大阪府環境フェアに初出展し摂津市を始め市民から共感を得、事業の正当性を再確認する。

平成18年3月リサイクル高強度磁器食器の商品化に成功、営業開始である。

(17年度岐阜県補助)

「事を成すに誠意に非ざれば、即ち凡百成らず」、事をなすには誠がなければ、あらゆるものは成就しない。「信、上下に附すれば、天下甚だ処し難き事無し」、上下の人々に信用が有ればこの世で出来ないことはない。換言すれば真に汗をかかなくして信は生まれずで他人と繋がらない。

17年度回収目標10トンを達成できたことで「オンリーワン企業」として市場展開でき、産地に新たな事業が誕生した瞬間であり当事者として存在感を得た瞬間でもあった。

平成18年4月 リサイクル高強度磁器食器の実用新案登録(第3119342号)取得
都内で評価を得、中部圏・近畿圏、四国にも採用が広がる。



●平成18年10月、経済産業省新連携事業として認定を受ける。

申請内容：「廃食器回収によるリサイクル高強度磁器食器の製造・販売事業」

●平成18年12月、会社再建策として環境事業を廃部、餌取英樹氏と稲葉雄造氏には退社願う。

●平成19年1月、NHK岐阜放送局から「地方発全国にチャレンジ・もったいないこと」で初取材を受ける。1月NHK東海版で放映、2月にはNHKおはよう日本(全国版)で放映される。時は中国特需で金属高騰、廃食器中のアルミナ資源保護が話題となり、市場でフォローの風を得る。

●平成19年10月 第9回グリーン購入大賞優秀賞(グリーン購入ネットワーク)を受賞

授賞式会場は仙台市、本受賞でおぎそ知名度がアップし始め、環境広場さっぽろ、びわこ環境フェア、京都、熊本、徳島環境フェアなどに出展参加し始める。

●平成20年4月 中日新聞に掲載「地球に優しい食器」こどもタイムズわくわく探検隊

●平成20年5月 岐阜放送から取材 22日放映「リサイクル食器と環境教育・中京女子短大生出演」
20年1月中京女子短大(瑞浪市)で「リサイクル食器について」の講義した縁で女子大生がテレビ出演した。学生さんにすれば放送局からの指名もあり「びっくり」されたと思う。

●平成20年10月 年間回収目標40トン達成 販売数量に匹敵する回収量を確保する。

他社製廃食器を回収しOGISO製エコ食器に切替提案できる食器、所謂、教育に貢献する食器事業を開発したのである。単に資源保護の回収ではないことを認識して頂きたい。回収目標40tが達成することで生産を含めた事業として歩ける道が出来上がるのである。

●平成21年7月 第3回ものづくり日本大賞優秀賞を受賞

経済産業省・文部科学省・厚生労働省・国土交通省の4省庁連携表彰事業

この表彰制度、自身難関な応募であると思ったが受賞後、審査員のご意見は異口同音に「教育市場に貢献する事業である」と語られた、とのこと。やはり目指したところに間違いはなかったと安堵したことを思い出す。

この年には、既に3人の息子が入社、営業、出荷管理、製造管理を経験している。3人が一丸となって「義利両全」の事業として遂行することが社会貢献につながり先人に感謝できるのである。

●平成21年10月24日 代表取締役を退任する。

西郷隆盛は「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽くして人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」と訓している。若者に責任の二文字を持たせ、後見人となることこそが事業継続に繋がる、よって退任した。

●平成22年4月19日 読売新聞全国紙に「給食の欠け陶磁 再び器に」

掲載される。長兄（順誼）に福井の友人より読売新聞が届く。

実弟が全国紙に掲載され、住職である長兄から「ご苦労様」と労いの言葉を頂いた。この言葉から「独り立ちが出来た」の感を得た。

●平成22年4月27日 共同通信社取材、地方紙から問合せあり

●平成22年10月19日 資源循環技術・リサイクルシステム賞(経済産業省)を受賞

●平成22年10月19日 岐阜県、和歌山県に続き、神奈川県リサイクル認定制度で認定品となる。

●平成22年11月4日 中京テレビで放映「食器の資源循環」

●平成23年2月2日 エコマーク・アワード2010奨励賞受賞(日本環境協会)

エコマーク誕生して20年が経過、エコ商品製造メーカーだけに与えられた表彰制度に応募、結果はやはり「学校教育市場に貢献する食器事業」が認められたのである。

●平成23年3月31日 リサイクル高強度磁器食器生産量に匹敵する回収目標70トンを達成する。

年間150万個を出荷する中、エコ食器が約50万個である。150万個分としては約70トンを要し現実回収しその目標を達成したのである。

●平成24年3月31日 都23区内でリサイクル高強度磁器食器と高強度磁器食器で過半数を占有する

●平成23年10月10日 大阪府リサイクル認定制度で認定品となる

●平成24年4月～25年3月 東洋大学文学部第1部中国哲学文学科科目履修生として通学

全国行脚を志した際、足が震えた。結果、一期一会で数々を受賞できたのである。誰に語らうことも出来なかった思い、通学したことで改めて教育の大切さ、人生の楽しさを学ぶことが出来た。

●平成25年7月 土岐中央ロータリークラブ会長就任

クラブに入会し19年が経過、全国の会場で多くのロータリアンと名刺交換（異業種交流）ができ、多くの町々で事業が紹介でき、おぎその信用というものを得た、と思う。

●平成25年6月 広域認定(環境省)を取得する(全国228番目)

自ら生産した物は自ら回収する。これが国の目指す基本原則であり生産、販売に係わるものは常にここを目指すこと、目指さなければ道は続かない。所謂、事業が3代続かないのである。

* 「いっさい塾に心を寄せて思うこと」

本当に公欲を目指し成し遂げた先人達がいたからこそ、私自身も立つことが出来た。その一人、まずは山田方谷先生。危機的な財政状況の松山藩を建直した人です。江戸末期、国の内外で不穏な空気が漂っているさなか「自国の守りは自分たちの手で」をモットーに



藩政改革を断行、山地の砂鉄で備中鋤を商品化しこれが大ヒット。次は藩札刷新、信用の低い藩札を集め焼却、新たな藩札で商品取引を活性化させ、次は士民撫育、所謂、みんなが平等に学問をする機会を与えた。次は農兵隊、後の奇兵隊です。改革も目処が付きここで退き、藩主板倉勝静から寺社奉行を拝命。この時現れたのが長岡藩の「河井継之助」、門前に座り懇願し、入門後理財論「事の外に立ちて事の内に屈せず」を学び、方谷より王陽明全集を入手し、越後長岡に戻り学



んだ改革を実行し見事に長岡藩を建て直した。この二人に限らず、堀井理事長 小木曾 鈴木氏 先人達がいたからこそ、この良き時代に生活できる喜びをみんなが感謝しなければならない。また、こんな先人、ご存じですか？今では私の心の師です。

会津若松、戊辰の役で家老西郷頼母の部下の秋月悌次郎。会津で生まれ藩命により昌平黌に学び、水戸、備中松山、薩摩を訪ね歩き、藩命で蝦夷地（北見）に転勤、混沌とする京都、主君松平容保の命で 最古の庶民学校閑谷学校（備前市）寒冬の蝦夷地から道内を縦断中に凍傷にもなるが、北前船で敦賀に上陸し戊辰の役に参戦、会津若松城落城時は自ら白旗（白無垢使用）を掲げて降伏、調印役。後に旧制熊本高校の教授となり無事退官後、東京にて没す。江戸の末期、一人の人間が命を受け長い日本列島を本で行脚したというこの事実、今の時代に無いものが当時は有ったのである。使命感、責任感の凄さを痛感する。それが恕であり譲である。鷗鳴フォーラム、藩校サミットの基調講演で講師が語っている。

「今の時代、事業経営は利益優先、何か失っているものがある」それを上役は知っているが言葉に出来ない時代、そんな立場の上司ばかりが幅を効かせている職場であり時代である。自身、今に思えば知分と知足を認識し一芸の師となって語れる時代が来なければいけない、と思う。私の町内の方、塚本保郎氏（86歳）が語る。「おぎそさん、岩村に通っているの」小学生の頃、先生から論語で「剛毅木訥仁に近し」「巧言令色鮮し仁」この言葉、何度もよく読まされ教えて頂いたよ。人生を長く生きてるとこんな人を多く観るようになったよ、残念だね。正しく、この言葉、時代を反映している言葉であり、今の時代こそ剛毅木訥仁に近しを語る時である。

●「最後に一言」

若者よ「剛毅木訥仁に近し」これを心に刻むこと。物事に恐れず立ち向い（剛）、苦難には耐え忍び（毅）、質実で飾らなく（木）、口数は少な（訥）すること。

現在授かっている（与えられた）仕事、例えばおぎその仕事（営業・経理・仕入）です。自ら持ち歩く品物であり社内情報、これらを例え電話といえども先方の方と対応する折に、自らの一言が世のためになっているかどうか、を見極めることが寛容である。この心が少しづつ理解できることが人として授かった仕事の楽しさである。佐藤一齋先生に出会い、ここに至るまでハンドルを持ち続けた私。弊社おぎそは三人の息子達と社員が一丸となり長かった坂道を上ってくれたからこそ、バトンタッチも出来、その結果が今である。是非、これから生きていく若者達に温故知新という言葉の重みを感じて頂きたいし、学んで頂きたい。伝統ある陶磁器産業に食器リサイクルというソフトとハードが確立できた今、若者達の手によって新たな風が吹く事を期待してやまない。

「書を著して後生に残す」

人は百までも生きられない。後世に自分の考えを残すのが一番良く、その人の精神は永久に死なない。自身、この条文により記述した。

●リサイクル食器事業で講演

「質問でRe-高強度磁器食器が開発できた経緯を語ることがある。」

一番に寺に生まれたこと（思想）、二番に商船士官であったこと（資源保護）、三番に全国行脚ができたこと（一齋塾）に尽きる。人間哲学にすれば、学（自ら市場調査をし）、思（今思えば菩薩5人衆に出会い）、行（貴方しかできない学校給食用廃食器の資源回収の必要性を諭されたこと）が繋がったのである。

1. 平成19年4月12日 集団給食サービス会社研修会にて講演
「強化磁器食器のリサイクルがスタート」
(参加者グリーンハウス・シックス・パスト・パーソナブリッジ・フジ産業・一富士・藤江ほか)
2. 平成19年12月3日 岐阜大学地域学科 「グリーン購入に賭けたものづくりが開花」
3. 平成19年12月27日 旭川市教育委員会（学校給食調理従事者冬季研修会）「食器の取扱い方」
4. 平成20年1月29日 中京女子短大（瑞浪市） 「リサイクル食器について」
5. 平成20年2月6日 滋賀県グリーン購入ネットワーク「グリーン購入物品契約について」
6. 平成21年4月7日 多治見市陶磁器商業組合「リサイクル食器の明日への展望」
7. 平成21年9月9日 日本厨房工業会（東海支部）
「強化磁器食器も割れ物、トレーサビリティで貢献」
8. 平成21年11月5日 日本給食サービス協会（東海支部） 同 上
9. 平成21年11月10日 日本給食サービス協会（北日本支部） 同 上
10. 平成21年11月20日 日本給食サービス協会（九州支部） 同 上
11. 平成21年12月2日 日本給食サービス協会（関西支部） 同 上
12. 平成22年6月10日 食品工業会「美味技術研究会シンポジウム」（ビックサイト）
「食の色彩とおいしさ」
13. 平成23年2月17日 岐阜県中央会 「環境経営とビジネス」
14. 平成23年11月12日 いわむら一齋塾「何故、佐藤一齋に心を寄せるか？」
15. 平成25年1月15日 東洋大学山谷教授環境セミナー講座「環境保護と哲学」
16. 平成25年7月3日 土岐市立泉中学校出前講座「発想の転換が職場を護る」